国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the naturalness of conversation : A contrastive study between English and Japanese

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐々木, 倫子, SASAKI, Michiko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001139

国立国語研究所報告105 研究報告集14（1993）

会話の自然さについて

― 日英対照研究の視点から ―

佐々木　倫　子

SASAKI Michiko: On the Naturalness of Conversation －A Contrastive Study between English and Japanese－

要旨：小説の会話文とその訳文，映画，テレビドラマなどの創作会話が，自然会話と異なることは知られているが，現在でもなお，話しことばの研究・教育に多く用いられているのも事実である。なぜ利用されるのかを，推理ドラマのジャンルを取り上げて検討した。

検討は，日本語および英語の母語話者に対する自然さに関する意識調査と併せて行ったが，調査は書かれた会話を目にした母語話者が，読解のスキーマを活性化させ，自分でテクスト・タイプを設定し，会話文の自然さを判断することが多いことを示唆した。創作会話は自然会話から「正常な非流暢さ」を除去し，効率的な情報伝達を込めて，理想的な会話を作り上げたものというわけではない。構造の二重性，ジャンルの文体性，せりふの芸術性等に起因する差異があり，種々の話しことばの項目分析のデータとして用いるには疑問がある。今回の調査の範囲では，自然会話と創作会話（およびその翻訳）との差異は認められたが，原文と訳文はよく対応していた。また，文脈依存性の高さは，自然さ判断とは結び付かなかった。

キーワード：会話，自然さ，データ，日英対照，テクスト・タイプ

Abstract: Fictional conversation as in novels, their translations, movies and TV dramas are known to be different from natural conversation. And yet, they are widely used in research and education. This paper explores the reason for this, along with a survey on the naturalness of written conversation conducted by native speakers of English and Japanese.

Native speakers faced with written conversations tend to activate their schema and decide each text type first. Then, they judge the degree of naturalness according to each genre. Fictional conversation is not an ideal conversation which can be produced by removing the features of "normal non-fluency" and making it efficient in transmitting information. The differences caused by dual structure, stylistic variation and artistic effects of prose lowers the validity of data for various analyses of speech. Within the data of this paper, the translation showed close correspondence to the original, and the degree of context-dependancy showed no relation to the judgement of naturalness.

Key words: conversation, naturalness, data, contrastive studies between English & Japanese, text type

1.　研究対象と方法

1.1.　研究・教育における創作会話の利用

日本語と英語の対照研究は，膨大な研究成果を擁する分野である。そして今後も多くの研究が生み出されていく分野であると思われる。これらの研究は何を目的としてなされるのだろうか。日本語と異なる構造を持つ言語があるから，その構造的差異を解明したいという興味をもってなされることもあるだろう。しかし，日本語と英語という異なる言語を持つ集団間のコミュニケーションのパターンの違い，また，日英語の話者が接触した場合のコミュニケーション上の問題点の解明を，最終的目標とすることも多いのではないだろうか。対面コミュニケーションはもとより，国際電話などを駆使する，直接的な，即興性の強い異言語間コミュニケーションが，ますます一般化していくと予想される現在，実際のコミュニケーションの場で機能していることば，なかでも聞く・話す場で運用されることばを対象とする研究は増加していくと思われる。

これまでの話しことばを対象とした日本国内の研究を見ると，社会言語学あるいは心理言語学の立場を鮮明にする研究を別として，かなりの論文が小説中の会話文，映画・テレビドラマの脚本，テレビ番組の文字化をデータとして用いている。また，日英対照研究の場合は，小説の原作と訳書の中の会話文の利用と，映画・テレビドラマの脚本の利用が多い。

さらに，最近の第二言語／外国語教育を見ると，映画・ビデオの利用がいっそう広がる様相を呈している。英語教育を例にとると，日本国内においてもグローバル・コミュニケーションの時代がうたわれ，一般の会話学校は無論のこと，中学から大学レベルの英語教育までが，話す能力の養成を重視し始めている。それと共に，「生の」英語を学ぶというキャッチフレーズのもと，アメリカやイギリスの一般映画・テレビ番組を教材として利用することが盛んになってきている。これまでの「人工的な」ＬＬ教材では教師も学習者も満足しない。同じ言語形式を学ぶにしても，実際の運用の中でどのように現れるかを重視して，「生の，自然な」映画やテレビ番組を使う。そのために，

単語表を作る，内容質問を用意する，脚本を付ける，一部を切りとって繰り返し部分を付加する，付属音声テープを付ける，英語字幕を利用する，日本語字幕を利用するなどの様々な工夫をして，なるべく早い段階から「生の」英語・「生の」文化との接触をはかる。（日本語字幕ではなく）英語字幕入りのアメリカ映画が，日本国内の一般のレンタルビデオ店でも借りられる時代をむかえ，「生の，自然な」英語学習はますます盛んになるのではないかと思われる。

一方，日本語教育の世界はどうか。ここでも，ビデオ機器の普及とあいまって，映画・テレビ番組の利用はますます盛んになると思われる。英語教育同様，「教科書体でない，文脈付きの，こなれた，生の，自然な」日本語に触れることの重要性が学習者・教師双方から主張される。確かに，「生の」とか「自然な」とか形容される映画・テレビドラマの中の会話と，語学教材の会話との間には差異がある。語学教材，特に初級教材の会話は，内容伝達よりも言語構造の理解と定着を優先し，そのためさまざまな言語構造上の制約を受ける。しかしそれでは，言語構造上の制約を受けない一般映画・テレビドラマのせりふは，即，自然な会話文ということになるのだろうか。

1.2. 創作会話文の自然さ・不自然さ

小説・戯曲の中の会話文が自然会話と異なることは，これまでにも指摘されてきた。Burton（1980）には，Abercrombie（1959）の次の一文が引用されている。[1)]

— But the truth is that nobody speaks at all like the characters in any novel, play, or film. Life would be intolerable if they did; and novels, plays or films would be intolerable if the characters spoke as people do in life. Spoken prose is far more different from conversation than is normally realised. —

（実のところ，人はけっして，小説や劇や映画の登場人物のように話しはしない。もしそんな風に話す人がいたら，実生活は耐えられないものになるだろう。また，登場人物が現実の人のように話したら，小説や劇や映画は耐え

られないものになるだろう。会話文というものは，普通に思われている以上に，自然会話とは異なるものなのだ）

さらに，西岡（1984）には次の一文がある。[2]

— 小学生の子供が主人公の或るテレビドラマを観た時である。絶妙な会話とドラマ運びで，物語半ばにさしかかった時，一人の子供の勉強部屋で，子供達が集まって雑談するシーンになった。多分演出家は，「普段話している様な事を，自由に話して呉れ」とでも注文したのだろう。子供達は実に生き生きと，それこそ日常のリアリズムその侭に話し出したのである。ドキュメンタリーである。それ迄丹念に積み上げて来たドラマは，途端に茶の間のブラウン管から，白々しい空気を送り込み始めたのである。日常の言葉のリアリズムが，見事に“ドラマの言葉”を失わしめたのだ。—

そして，佐竹（1992）は，若者雑誌における投稿文，ジュニア小説，ジュニア小説の作家へのファンレターなどに見られる，いわゆる新言文一致体を数量的に分析し，書きことばの会話体との差異として以下を述べている。[3]

— 新言文一致体は，語種比率，名詞比率，文の長さ，指示語比率，働きかけ文の比率などで，書きことばにおける会話体以上に実際の談話語に近い値を示す事実を得ることができた。この事実は，新言文一致体が，「考えて会話ふうに書く」文体というより，「思いつくまま，感じるままに相手に話しかける」文体であることを示すものであろう。—

以上，どれもが創作会話と自然会話との距離の大きさを指摘する。にもかかわらず，創作会話が今も話しことば研究のデータとして用いられることの根拠は何だろうか。

データ収集は常に時間・労力との戦いの面を持ち，その意味では文字化過程まで終了した，あるいは，文字化の容易な大量の文脈付きの会話文が瞬時にして手に入ることは効率的である。さらに創作であれば，自然会話の収集が直面する様々な困難点（あらかじめ関与者に通知しなければいけない，しかし，通知すればなんらかの自然さが失われる，研究意図にそったデータが得られない，等）に悩むこともない。しかし，上記の2点だけが理由で，会話文が研究・教育に用いられることは考えられない。やはり，創作会話が母語話者の言語能力を反映している，あるいは，現実の言語運用を反映している，母語話者にとって自然だと感じられるからこそ，用いられるのではない

だろうか。母語話者にとって不自然だと感じられるデータをもとに，仮説の検証をするということは考えられないからである。

1.3. 研究項目

本稿では会話の自然さをテーマに，以下の項目について検証を試みたい。

(1) 疑似即興性と自然さ

とっさのやりとりであることを示唆する「会話の即興性」は，自然さ判断の要因となる。創作会話には真の即興性を示す，言い間違い，脱線，言い淀み，文のねじれ等は存在しない。しかし，疑似即興性を備えた，いかにも即興的に言われそうな表現は盛り込まれる。小説→脚本→せりふの文字化の順に疑似即興性が増し，それが創作会話の「自然さ」を高める。

(2) 二重構造性と自然さ

創作会話は，分析者とは異なる人間である作者が，（作者自身ではなく）登場人物に言わせようと考えた形が出発点になっている。直接的な語りかけは地の文においてもまずとられないが，作者は読者／視聴者と，登場人物のせりふを通してコミュニケーションを成り立たせようとしている。つまり，多くの自然会話とは異なり，コミュニケーションが二重構造になっている。従って創作会話は，けっして会話の参加者にはならない読者／視聴者に対して主題を伝えることを主要目的とし，わかりやすさが大きな条件となる。そのため主題の展開に関係のある情報が，順序よく提出される形をとりやすい。しかし，構造が整理されていることは，理想の話し手・聞き手，つまり，母語話者の言語能力の反映ととられ，また，二重構造性は表面に現れることが少ないので，自然さ判断にはあまり影響がないと思われる。

(3) 文脈依存性と自然さ

自然会話の場合，関与者が多くの背景知識や文脈知識を分かち合うことも多い。創作会話は自然会話に比べて，（特に作品のはじめの部分で）文脈依存性が低いと思われる。文脈依存性の高さは，感じる自然さに比例する。

(4) 文体と個別的，文化的，分野的差異

英語でも日本語でも自然会話と創作会話との間には距離があるが，その距

離の取り方には，個別的，文化的，分野的差異がある。また，翻訳の場合，いわゆる翻訳調・原文の影響を残す文体が容認されており，母語話者同士の自然会話との距離はさらに広がることになる。

1.4. 本稿のデータ

本稿では，小説の会話文とその翻訳文とを出発点とする。そのため，話しことばの大きな要素である，音声情報と非言語伝達情報の大半が抜け落ちることになる。これらがコミュニケーション全体に大きな役割を果たすことと，自然さ決定の重要な因子となることは明らかである。例えば，一般映画が語学教育映画に比べて自然だとされる背景に，発音がより自然だから，背景音がふんだんに入っているからといった理由が挙がることは想像に難くない。しかし，それがすべてならば「あの小説は会話がいい」「この脚本は不自然なせりふが並ぶ」といった感想は成立しないことになる。音声面を含まない会話の自然さ判断も成り立つわけで，今回はその視点に立ちたい。

本稿では以下の原則に基づいて，主として推理小説のジャンルに属するものを中心に，限られた量を取り上げる。

(1) 成人の母語話者間の対話であること
(2) 方言ではなく，現代の共通語的とみなされる会話体のものであること
(3) 情報要求機能の含まれた対話であること
(4) 法廷の公判，警察内の取調べといった，普通の状況とは極度に異なる

表1 出典一覧

テクスト	日本語	英語
小説原文中の会話	砂の器 点と線 真夜中のための組曲	推定無罪
小説訳文中の会話	推定無罪	点と線 真夜中のための組曲
脚本中の会話	砂の器	
映画・テレビドラマせりふ	砂の器（×3）	推定無罪
字幕	推定無罪	—
自然会話文字化	録音器	A Corpus of English Conversation

環境で設定された会話は除外すること。

今回，推理小説・推理ドラマのジャンルを取り上げた第一の理由は，登場人物が会話を交わす場合，法廷場面や尋問場面を除き，日常会話体に近いとされる文体で簡潔に情報伝達をすることが多いと考えられる点にある。しかし，それならば日常会話体とは何だろうか。仮に，日常生活場面で交わされる会話の文体といっても，様々な場面があり，関与者がいる。これまでの自然会話の分析によって，雑談，買物場面，教室場面，医師・患者場面などのそれぞれの会話の持つ特徴が解明されてきている。日常会話体とくくることの粗雑さは言うまでもない。[4] しかし，現代推理小説が純文学とは異なり，通常とは異なった語句の使い方に作者の個性を反映させるといったことが少ないことは確かである。Burton（1980）には，いかに戯曲が自然会話とは異なるかが，様々な例および引用によって示されているが，華麗な様式美を強調する舞台劇のせりふや，歪められた虚構性を強調する現代劇のせりふに比べて，推理ドラマのせりふは日常的であろう。

このジャンルを取り上げた第二の理由は，膨大な読者数・視聴者数を持っていること，翻訳された小説がかなりあること，映画化・テレビドラマ化されたものが多いことである。現在話しことば研究のデータとして用いられることが多いだけでなく，今後も研究データとしても，教育の素材としても，広く使われる可能性が大きいと考えた。その中でも，例えば，テンポの早いやりとりを特徴とする，いわば，せりふの鑑賞的要素が大きいものは取り上げていない。今回は上記のデータの中から，ごく一部を取り出し考察する。さらに，自然さに対する意識調査を日本語および英語の母語話者に対して行い，併せて検討する。

1.5. 母語話者意識調査

日本語母語話者に試みた，会話文の自然さに関する意識調査について述べたい。調査対象者は日本語を母語とし，日本語教育に現在従事している，あるいは，将来従事する興味を持つ20代以上の男女66人である。教育の素材として，研究のデータとして，会話テクストを扱うことが多いと思われる集

団である。意識調査はアンケート記入式で，簡単な指示のもとに行われた。

☆以下の対話のそれぞれを読んで，（　）に番号を書き入れ，なぜそう感じるかを答えてください。

(1) かなり自然な感じがする→なぜそう感じるか
(2) やや不自然だ →なぜそう感じるか
(3) かなり不自然だ→なぜそう感じるか

理由書き込み欄は小さいスペースにし，所要時間を10分程度として，直感に従い手短かに書き込むように依頼した。

会話テクストは全部で7つで，出典を明らかにせずに，提示した。

1　自宅で　夫と妻　(2.5.4.で述べる小説の会話)
2　友人同士　(日本語中級教科書の会話)
3　バーで　刑事とホステス2人　(2.2.1.で述べる映画脚本)
4　バーで　刑事とホステス　(下に提示する小説の会話)
5　殺人事件について　友人同士　(2.5.10.で述べる映画字幕)
6　駅で　知人同士　(日本語初級教科書の会話)
7　友人同士　3人　(2.6.1.で述べる自然会話)

以下は4の例である。出典を消し，(1)と(2)の会話文のみ提示した。

4　バーで　刑事とホステス
(1) 刑事：東北弁というのは，どうしてわかりましたか？
(2) 女　：先輩の客が話していたのは，たしかにズーズー弁でした。話の内容は，はっきりとわかりませんが，言葉の調子がそんな具合でした。若いかたの言葉は標準語のようでしたが。
(回答)（　）→

なお，英語の調査は，英語母語話者（アメリカ人男女各1，オーストラリア人男女各1，イギリス人男性1）に対して，アンケート記入および記入後のインタビューを行った。テクストは日本語にほぼ相当するものである。

2. 考察

2.1. 日本語小説中の会話文

2.1.1. 会話文と地の文

小説において，ある部分は会話文となり，他の部分は地の文となる。その選択はどこでなされるのだろうか。登場人物を，より生きたリアルな人間として描くためには，あたかもかれらが話し合っているかのような形を積み上げていく方が効果的かもしれない。しかし，状況描写も人物紹介もなしに会話文だけを羅列していくことは意味をなさない。現実の会話は，場面文脈や非言語行動にかなりの量の伝達を受け持たせる。従って，現実に近い形を小説に取らせるとすれば，口頭で伝達される狭義の言語部分を会話文にし，パラ言語的情報，非言語伝達部分，背景説明，場面説明を地の文とすることになるだろう。しかし，ストーリーの展開のスピードや，読みやすさなどの種々の要因が加わり，構成が決定される。会話文と地の文の構成については，樺島（1979）に詳しいが，会話文の中で伝達されるのが自然な情報が，一気に地の文で片付けられることも多い。下のテクストにおいても，「全部が一致して言ったのは，被害者に東北弁の訛りがあったことである」「話の内容がわからないことは，証人たちの全部が同じだった」という地の文にそれが読み取れる。

以下のデータは，小説の中で殺人事件が起こり，捜査官がバーに出かけて，被害者とその連れらしい男の身元を割り出そうとしている部分から得た。

□原作（文中会話文に番号を付加－以下すべての会話文も同様）

(1) 「東北弁というのは，どうしてわかりましたか？」
係官はきいた。

(2) 「年輩の客が話していたのは，たしかにズーズー弁でした。話の内容は，はっきりとわかりませんが，言葉の調子がそんな具合でした。若いかたの言葉は標準語のようでしたが」

話の内容がわからないことは，証人たちの全部が同じだった。

ただ，バーの中では，従業員も客も，時おり，手洗いに行っている。

その二人が腰掛けた所は，トイレの入口の扉の横にあるボックスだった。だから，トイレに出入りするたびに，そのボックスのそばを通らなければならない。自然と話

の断片が小耳にはいったのである。

(3) 「カメダは今も相変わらずでしょうね？」

被害者の連れは，被害者にそう東北訛りできいた，とバーの女給の一人が話した。

これは，すみ子だけでなく，もう一人の女給も小耳に挟んでいた。

（松本清張（1971）『砂の器』　文芸春秋　p.15　1960年に新聞連載）

2.1.2.　小説会話文の凝縮性

小説中の会話文について，松本清張の『点と線』には次の一節がある。

― こんなふうに一気に言ったのではなく，老婆はたどたどしく話した。―

（松本清張（1972）『点と線』 新潮文庫版　p.46）

確かに，くどくどしい，あるいは，要領を得ない，話し手と聞き手がやっと二人で作り上げていくような現実に時に見られる会話に，喜んで付き合う読者はいない。推理小説の登場人物は，作家によって生み出され，それぞれの個性を与えられるが，なおかつ，全員に共通する点がある。それは主題の展開を助ける動きだけをする点である。会話文では簡潔に，無駄のない情報伝達がなされることが多い。「『カメダは今も相変わらずでしょうね？』被害者の連れは，被害者にそう東北訛りできいた，とバーの女給の一人が話した」という文では，本来は「東北訛りできいた」までが会話文で表されるべきであるが，キーとなる部分を浮き上がらせるために，地の文で多くを表している。こういった凝縮化の手法は随所に見られ，そのために，テクスト中の(2)と(3)の会話文は地の文なしにはつながっていかない。

(2)の会話文はそのまま口頭で言ってみると，「かなり不自然だ」という印象を与えるのではないだろうか。縮約形も音変化もなく，間の表現もなく，終助詞もなく，重複や脱線，倒置もない。30年以上前の話し方とはいえ，「です・ます体」で通しているのも不自然である。「年輩の客」という言い方も，話しことばの語彙とは感じられない。文の長さを文節数で測った，日常談話－3.81，座談会－5.49，講義－9.31ニュース解説－21.02という『談話語の実態』の報告[5]があるが，それから見ると，(2)は日常談話からはほど遠いということになる。さらに，同報告には，文の長さについて以下のような傾向があると述べられている。[6]

— 公共施設で採集されたものは比較的文が短く，家庭内で採集されたものは比較的文が長い。（中略）事務的な態度で知的反応を目的とする談話は，その他の場合より文が短い傾向が見られる。—

バーでの応答が，「公共施設で」「事務的な態度で」「知的反応」に該当するかは議論の余地があるが，この傾向と反して一文が長いことは確かである。以上，同様の場でありそうな自然会話との距離がかなり大きい会話であることを見た。

2.1.3. 意識調査結果 －小説中の会話の自然さ－

かなり不自然だと思われる小説の会話を母語話者はどう捉えただろうか。意識調査では異なるグループに属する人々に調査したが，グループ間の差，年代差，性差は有意とは認められなかったので，以下に回答の全体数のみを挙げる。

結果は，全66人中，(1)かなり自然　と答えた者30名，(2)やや不自然　と答えた者22名，(3)かなり不自然　と答えた者7名，そして，無回答7名である。全体として回答者がわりあい自然だと感じたことを示す。では，なぜそう感じたのだろうか。以下に理由35のうちの主なものを示す。かなり自然であると判断した理由に○印，やや不自然の理由に△印，かなり不自然の理由に×印を付けた。

まず，主として内容面を指摘していると思われる理由は9ある。

○しっかり理由を述べている。○特に問題のないやりとりだと思う。（筆者－様式面の指摘か？）○東北弁＝ズーズー弁だと思うから。

△「たしかに」といっているのに，あいまいな点がある。△刑事の質問に対する女の答え方が不適切だ。（様式面の指摘か？）

×「どうして」の問いの答えのポイントがずれている。×ズーズー弁というのは東北だけではないと思う。

様式面を主に指摘していると思われる理由は20と多い。「自然さ」の判断を求められたことによって，伝達される内容よりも言語形式に注意が払われたことがわかる。言語形式の中では，文体への言及が一番多く，次に，即興

性の欠如を指摘する声が大きい。つまり，ホステスの会話文が丁寧で整いすぎている点と，「年輩の客」と「若いかた」という語の待遇レベルの差の指摘である。

△「年輩の客」と「若いかた」では統一性がない。△「客」は「お客さん」の方が自然。△ホステスの言葉がていねいすぎる。△女の話し方があまりにもきっちりしすぎていて，頭の中で考えた内容をそのまま話しているとは思えない。△整然としすぎている気がする。

×言いよどみなどがない。×これほど女の言葉がスムーズに出るはずはない。×ホステスのことばがしっかりしすぎる。×説明的，叙述的すぎて不自然だ。

次に，自然さの判断の根拠に以下のような理由が6あったことに注目したい。

○たぶん「砂の器」の一部だと思うと安心する。○読んだことのありそうな会話だ。(「砂の器」？) ○刑事の質問に答えるという会話なので自然に感じる。○刑事と目撃者という役割からすると自然な会話だ。

意識調査では，出典もテクストの種類に関する情報も与えられていない。回答者がどのように自然さの判断を下したかというプロセスは，調査後のインタビューが行えなかったので確実には言えない。しかし，上記の理由を挙げた回答者は，対話者の職業，および，会話が書かれたものであるという点から，まず，このテクストは推理小説であると判断したのではないか。そして，推理小説として受容した上で，第三者，つまり，読者の立場に立ち「推理小説の会話として読んで自然かどうか」の決定を下したのではないだろうか。

2.2. 映画の中の会話

2.2.1. 映画脚本例

小説とその映像化が同じということはあり得ない。中には，タイトルだけを借りる，登場人物だけを借りる，ひとつのエピソードだけを借りるといった極端な例もある。そのような例は別として，全体のストーリーが一致しているものを取り上げても，大画面で目からの情報が鮮明に伝達できる映画と，言語情報に大部分を頼る小説とは，まったく異なるものである。次に引用す

る意識調査テクストは，映画の脚本から得た。場面は2.1.1.に該当する部分である。

□バーで刑事とホステス2人

(1) 刑事：はっきりした内容でなくていい，何か一言だけでも覚えていることはないかね
(2) 女A：（女Bに向かって）あんた，気がつかなかった？
(3) 女B：え？
(4) 女A：水割りのお代わりを持って行ったでしょう，その時
(5) 女B：（首をひねり）ううん，私はなにも
(6) 女A：ね，2度目の水割りを持って行った時に，確かカメダとか
(7) 刑事：カメダ？
(8) 女A：ハイ，2，3度そう言う言葉が……カメダはどうしたとか，カメダは変わらないとか
(9) 刑事：カメダ？カメダに間違いないね
(10) 女A：ハイ，間違いありません
（出典　脚本　橋本忍・山田洋次　シナリオ作家協会編（1975）『年鑑代表シナリオ集'74』 p.221）

脚本ではト書き部分にパラ言語的情報，非言語伝達情報が表されており，その点は原作と大きく異なる。さらに，確認の発話，応答詞，文末省略，そして，すべての発話が隣接ペアとして成り立っていく構成など，原作と異なる点は多い。作られた会話とはいえ，話しことばの特徴が随所に見られ，疑似相互作用，疑似即興性を作りだしている。これらは会話の「自然さ」を高めたのではないだろうか。

2.2.2.　意識調査結果 ― 映画脚本の自然さ ―

前述の66人の母語話者に意識調査をした結果は以下の通りである。

(1)かなり自然－44名　(2)やや不自然－13名　(3)かなり不自然－4名　無回答－5名　となり，原作よりもさらに自然な印象を持たれていることがわかる。ちなみに調査では，この会話テクストを3番目に，原作を4番目に置いた。

判断の理由41のうち，内容面に関するものは9あった。

○刑事がカメダという名前にこだわっているのがよくわかる。○考えながら，

思考の経路を追っている会話としては，割合自然である。○応答の内容がはっきりしている。
△(6)の女Aの，「確かカメダとか」は，(10)の「ハイ，間違いありません」程，自信を持って言われたとは思わない。△女Aは，不確かだからBに確認しながら話を進めてきたのに，刑事の「間違いないね」の一言で「ハイ間違いありません」では唐突すぎる。
×なぜ，水割りのおかわりを持っていくだけで，「カメダ」がはっきり聞き取れたと確信できるのかわからない。

主として様式面に関すると思われる理由は13である。
○(5)や(8)のような文末が自然。○「え？」とか「ううん」などの話し方がいかにも話し言葉的である。○同僚に対する，外部の人間に対する時の言葉の使い分けと，刑事の相の手が自然。○女Aは話しかける相手に応じて敬体，常体を区分して話している。
△「持って行った→もってった」等の短縮形がおこるはず。△(8)「2，3度そういうことばが…」は，長くて複雑。△(10)が全体の調子と違ってデス・マス調が急に表れる感じがする。
×(4)の「その時」は「あの時」でなければおかしい。

文体性に関する言及はやや多いが，内容面，様式面に関する言及は総じてあまり多くない。むしろ以下に示すように，テクスト・タイプ決定の根拠が19と多く述べられている。『砂の器』の原作に対するのと同じ意見を挙げた回答もある。
○たぶん「砂の器」の一部だと思うと安心する。○読んだことのありそうな会話だ。(「砂の器」？) ○刑事もホステスもそれらしい言葉づかいをしている。○刑事と目撃者という役割からすると自然な会話。○会話の焦点がはっきりしていて，場面が容易に想像できる。○それぞれの職業を表すような言葉づかいをしている。○場面が目に浮かぶ。こういう話の展開は普通だと思う。○ドラマで展開しそうな会話だ。
△TVドラマの脚本のようだ。△映画のシナリオっぽい。

×テレビ番組での会話のようである。×ドラマのシナリオの感じがする。これらの理由から，回答者の多くがテクストを脚本と判断した上で，読解のスキーマを活性化させ，脚本としての自然さを見たと判断せざるを得ない。

2.2.3. 映画せりふ文字化例

次に引用するのは，同じ場面の映画の音声の文字化である。既に述べた通り，もともと，小説の会話文との比較のため，すべての文字化は音韻レベルでとった。脚本とせりふの文字化との差異に注目したい。

□映画音声文字化　（バーで　身元割り出し捜査）

(1) 刑事：はっきりした話の内容でなくてもいい。何か一言だけでも覚えてることはないかね・・・どうかね。
(2) ホステスA：（ホステスBに向かって）あんた，気がつかなかった？
(3) ホステスB：え？
(4) ホステスA：ほらっ，水割りのお代わり持ってったでしょ，あの時。
(5) ホステスB：ううん，わたしはなんにも。
(6) 刑事：なにかあったの？
(7) ホステスA：あたしね，2度目の水割り持ってった時，確かカメダとか。
(8) 刑事：（すかさず）カメダ？
(9) ホステスA：ハイ，2，3度そういう言葉が・・・・・・カメダはどうしたとか，カメダは変わらないとか。
(10) 刑事：カメダ？カメダに間違いありませんね。
(11) ホステスA：ハイ，間違いありません。

（出典　映画『砂の器』監督　野村芳太郎（1974））

2.2.4. 脚本と映画のせりふの差異

脚本と実際の演技との差は，それぞれの制作陣によって決まる。映画の撮影中にせりふがどんどん書き変えられるということもある中で，この作品はかなり脚本に忠実だと言えよう。異なる点は以下の通りである。

(1) 縮約形・音変化　覚えている→覚えてる，持って行った→持ってった（×2），でしょう→でしょ，なにも→なんにも，わたし→あたし
(2) 間の表現の挿入　φ→ほらっ
(3) 語句の挿入　内容→話の内容，なくて→なくても，φ→どうかね，

ϕ→なにかあったの？

(4) 助詞の脱落　お代わりを→お代わり，水割りを→水割り，時に→時

(5) 指示詞の変化　その時→あの時

(6) 待遇レベル変化　間違いないね→間違いありませんね

けっして脚本が不自然なわけではない。が，ここに見られる変化は，さらに自然会話に近付く方向を示している。たとえ疑似とはいえ，相互作用性，即興性，文脈依存性を増す方向を示唆しているとは言えないだろうか。「内容→話の内容」だけが，文脈依存性を低めていることになるが，(3)の語句の挿入は，係長がなんとかホステスから情報を引き出そうとする動きを強め，いわば，相互作用性を高めていると言えよう。(1),(2),(4)の変化は，いかにも即興で話したという印象を強め，(6)は談話の終結に近付いたことと，はっきり確認したいという表現意図を示して，より改まった文体の選択をしたことを示す。そして(5)の指示詞の「その→あの」の変化に注目したい。ホステスAがホステスBに共有経験を想起させようとしている文脈を考える時，これはまさに当然の変更と言えよう。なお，ここに引用した以外の大多数の箇所で変更が見られたが，ほぼ同様の自然会話に近付く傾向を示していた。

2.3. テレビドラマ例

2.3.1. テレビドラマ文字化例

以下のデータは，ふたつのテレビドラマのせりふを文字化して得た。これまでと同じ場面である。

□テレビドラマA　せりふ文字化

(1) 吉村刑事：えっ確かですか。で，その二人，何を話してました？

(2) ホステスA：あんた，聞いた？

(3) ホステスB：ううううん，こっちに常連がいて話がはずんでたしさ。

(4) 吉村刑事：しかし，12時頃までいたんだろ？何かほんのちょっとぐらい，聞こえたことがあるはずだよ，お代わりの時とか。

(5) ホステスA：お代わりはしなかったわよ，最初注文しただけで。ア，注文した時はあのおじいさん，ズーズー弁だった。

(6) 吉村刑事：ズーズー弁っていうと東北弁？

(7) ホステスA：そうよ，ワタスもオンナズものいただきます。
(8) ホステスB：(笑) そういや，そうだ。オベンゾはどこですかって帰る前にも聞いたわよ。確かに東北弁よ。
(9) ホステスA：アー，あたし，思いだしたわよ，あの二人のしゃべってたこと。ほら，トイレ行く時，そこの前通るでしょ。そしたら言ってたのよ，「カメダはあいかわらずですか」って。
(10) 吉村刑事：「カメダはあいかわらずですか」？
(11) 今西刑事：間違いなくカメダですか？
(12) ホステスA：絶対間違いないわよ。だってあたしの名前，金田でしょ。自分のこと言われたのかと思って振りむいちゃったの。そしたら，おじいさんの方が「カメダは変わりませんよ」って言ったんで，(ア) なーんだ，金田じゃなくて，カメダかと思ったの。

(出典 『砂の器』(1977) 監督　富永卓二　脚本　隆巴　フジテレビ放映)

間の表現の多用，終助詞の増加，倒置，日常語彙の増加，男女差等が，いかにもこなれた会話体の印象を与える。

□テレビドラマB　せりふ文字化

(今西のナレーション「初めての客であまり関心がなかったらしく，ふたりのことはあまり覚えていなかった。」)

(1) 吉村刑事：ハイボールを飲んで30分位いた。その間何か気がついたことはなかったですか。
(2) バーテン：いやー。
(3) 今西刑事：ふたりの話，全然聞かなかったん (で) すか。
(4) バーテン：えー。
(5) ホステス：(かぶせるように) あのう，カメダとか，なんとか。
(6) 今西刑事：カメダ
(場面挿入－被害者の連れ：カメダは今も相変わらずでしょうね。
被害者：あいやー，あーも変わらずだあ。)
(7) 吉村刑事：東北弁，それは確かだね。
(8) ホステス：ハイ，東北弁でした。
(9) 今西刑事：(つぶやくように)「カメダは今も相変わらずでしょうね。」

(出典 『砂の器』(1991) 監督　池広一夫　脚本　竹山洋　TV朝日放映)

2.3.2. テレビドラマの会話の特徴

大画面に聴衆の関心を一身に集められる映画と違い，テレビの画面は小さい。しかも，聴衆は日常生活の中の明るい部屋で，家族などと共に画面を眺

めることになり，それほどの集中力も期待できない。その場合，映像にすべてを語らせることも難しければ，難解なせりふを朗々と語らせることも難しいと思われる。日常とかけ離れた虚構の世界を茶の間に送ることは難しく，映画よりもさらに日常的になるのではないか。上記の短い2場面から映画との差異を論じることはできないが，この2場面に際だっている特徴が，わかりやすさへの工夫と言えないだろうか。すなわち，せりふは視聴者へのわかりやすさを土台に作られ，少し位せりふを聞き落としても，ストーリーの把握，特に，キーワードの把握が出来るようになっている。ドラマAでは「ズーズー弁」と「カメダ」の2つのキーワードが，繰り返しだけでなく，例示によって印象付けられる。ドラマBでは，ナレーションおよび場面挿入によって，状況把握がよりたやすくなるような工夫がされている。ここに第三者に見せる，聞かせるための会話テクストの性格が色濃く出ている。

吉田（1988）は戯曲の対話の特性を次のように述べている。[7]

— 虚構の対話は，絶えず作者から読者への伝達目的の手段として機能する。又，日常会話と異なり，舞台の慣習に基づく特殊な表現（観客への呼び掛け，傍白など）も使用される。—

この特徴は戯曲だけではない。テレビドラマBのナレーションにも，その例を見ることができる。

2.4. 創作会話の特徴

以上，原作，脚本，せりふの文字化3種の，計5種類のテクストを見てきた。これらはほぼ同じ状況において，類似の内容を，類似の身分・年代の対話者間で伝達させているものである。そこで言語形式に共通性が見いだされるかどうかを見てみたい。結論から言えば，映画脚本とその演技を除いて，具現化された日本語の重なりはさほど多くはない。確かに，映画においてもテレビドラマにおいても，情報要求は捜査官から発され，最も重要な内容を持つ応答はホステスによってなされる。しかも，

映　　画ーハイ，2，3度そういう言葉が・・・・・・カメダはどうしたとか，カメダは変わらないとか。

ドラマＡ－ほら，トイレ行く時，そこの前通るでしょ。そしたら言ってたのよ，「カメダはあいかわらずですか」って。

ドラマＢ－あのう，カメダとか，なんとか。

という形で，情報提供をしている際の引用文における，文末省略，あるいは，倒置という文体は共通している。しかし，このわずかなデータから，捜査官への応答はかなり直接的な情報伝達に徹すること，また，引用文は文末省略されやすいといった仮説を立てることは出来ない。

映画，テレビドラマに共通して出てくる，捜査官の確認→ホステスの応答場面を取り上げると，

映　　画－カメダに間違いありませんね。→間違いありません。

ドラマＡ－間違いなくカメダですか？→絶対間違いないわよ。

ドラマＢ－東北弁，それは確かだね。→ハイ，東北弁でした。

となり，情報要求に対して直接的な応答が与えられていることは共通でも，待遇レベルもテンスも異なることがわかる。この程度のデータから言語使用量の傾向を見ることも危険である。実生活の会話者に言語運用量の差があるように，ドラマの登場人物も，ドラマＡのホステスは饒舌であり，ドラマＢのホステスは寡黙である。個々の発話に見られる発言量も，話題の関連性も，冗長度においても，指摘できることは少ない。ただ，作品の主題展開にとって無意味なせりふが一つもないということだけは，共通して言えるのではないだろうか。

2.5.　翻訳された会話文

2.5.1.　翻訳利用の利点・欠点

同じ伝達内容を２つの異なる言語でどう具現化しているかを探る場合，翻訳は最も近道に思われる。多くの論文において出版物の原文と訳文が対で利用されていることからも，それは伺われる。状況がまったく同じで，言語コードだけが異なる大量の会話文が手に入れられるのである。しかも，状況設定，話者の人間関係等，言語外情報も明示され，ある話題のもと，談話としてまとまった形で提出されているものが多い。

下図は翻訳のプロセスを示すが，Nida and Taber（1969）を基にした解説に，英語から日本語への場合を当てはめてみた。[8]

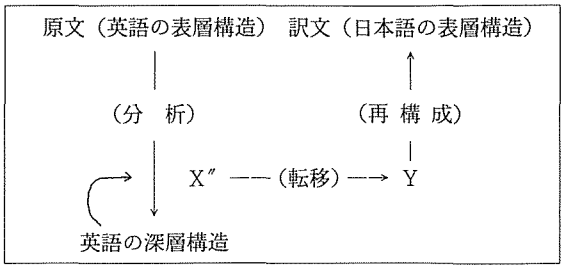

図1　翻訳のプロセス

翻訳の対象となる原文は，英語の表層構造である。その意味と形式との関係を分析によって明確にして，英語の深層構造を知る。次に，日本語に転移させるのに容易なレベル（X″）にまで分析を戻し，翻訳者の頭の中で日本語に移す（Y）。それに文体上の調整を加えた上で，日本語の表層構造を得る。従って，分析，転移，再構成の3段階があり，どの段階にも落し穴があると考えてよい。それは会話文にどう現れるのだろうか。

以下に日本の英字新聞に載ったコラムの意見を引用する。著者のイギリス人・ブース氏は日本語の十分な会話能力を有し，日本各地の人々と日本語で触れ合いつつ徒歩旅行をし，その旅行記を英語でまとめた。氏の著書はオランダ語，フランス語，日本語に翻訳されてもいる。そして，今回の日本語訳が落ちてしまった落し穴の第一番目に，氏は以下を指摘する。

The Japanese characters in the translation all spoke a great deal more elegantly than they did in the original,（中略）the result of a predisposition on the part of the editor（born and brought up in Tokyo）to believe that minshuku maids in Aomori sound like receptionists at the Sakura Bank.
（Alan Booth（1992. 8. 26）"The Pitfalls of Translation" *Asahi Evening News*）

つまり，日本語訳では，登場する日本人がすべて実際よりもずっとていねいな言葉遣いで話してしまっていること，そしてこれが翻訳者のせいというよりも，民宿のおばさんがまるで銀行の窓口嬢のように話すと思っている，東

京生まれ東京育ちの編集者の先入観によって起きたと，氏は説明する。実際，ブース氏が民宿で働く女性の話し方をそっくりまねて編集者に聞かせても，編集者はそれを認めなかったという。この場合には，再構成の段階で，編集者の方言や待遇表現に対する認識の低さがズレを引き起こしたのかもしれない。しかし，ここに別の要素が作用したことはないだろうか。つまり，日本の著者（訳者）・読者の双方によって容認されている，出版物の会話文の文体に合わせた可能性である。ノンフィクションの中の会話文であっても，自然会話そっくりに書かれることに対する違和感が強いのではないか。さらにここには，土地の人同士ではなく，外国人との会話であるという要素も加わる。自然会話と創作会話の文体との距離が，日英で異なるということはないだろうか。

英語の創作会話と自然会話との距離はどのようなものか。木下順二（1982）には，サマーセット・モームの自伝の一節が引用されている。[9]

―（モームは）『聖火』で，自分が「それまで用いていた写実的な会話」の代りに「一つの実験をこころみ」たとして，こういっています。この作品で自分は「登場人物たちに，彼らが現実に話していることばではなく，彼らが前から用意することができたら，そして，自分たちのいいたいことを，正確な，よく選択されたことばにうつす方法を知っていたら，用いるだろうと思われることばを用いさせ，もっと格にはまったことばで話すようにさせてみようと考えた。」―

さらに，英語から日本語への創作会話の訳はどうか。以下は木下（1982）にある，坪内消遥のシェイクスピア翻訳に関する一文である。[10]

―『シェークスピヤ研究栞』の中で，消遥は，わがシェイクスピア訳の長い道程をふり返って，訳文の文体の変化を五つの時期に区分していますが，その区分が，現在の私たちにいろんなことを考えさせてくれます。すなわち

1　「浄瑠璃まがひの七五調」であった時期
2　「知らず知らず雅文調」であった時期
3　「尚ほ能の狂言口調だけは捨てかねた」時期
4　「文語口語錯交訳時代」
5　「現代語本位訳の時代」―

以上のどれもが，創作会話と自然会話との距離を示し，さらに，その距離

が，異言語間の翻訳差，同一言語内のジャンル差，同一言語内の個人差，さらに同一個人内の作品差を持つことを示唆している。それでは，現代推理ドラマのジャンルで，創作会話と自然会話はどのような距離を示すのだろうか。

2.5.2. 英語訳文例A

以下の会話テクストは，原文日本語の小説の翻訳から得た。刑事が果物屋の主人に質問する場面である。

□英語訳文

(1) Detective: "May I ask you a question?"
(2) Detective: "How late do you keep the store open at night ? "
(3) Storekeeper: "I stay open until about 11. "
(4) Detective: "From here would you be able to see the passengers coming out of the station, say at 9:30 at night ? "
(5) Storekeeper: "Nine-thirty ? Oh, yes. There's a train from Hakata that arrives at 9:24 and I watch the people as they come out. The shop is quiet at that hour and I look for a possible customer."
(6) Detective: "I see. On the night of the twentieth did you happen to notice a man about thirty years old, dressed in Western clothes, and a woman of about twenty-five, in kimono, coming out of the station at that time ? "
(7) Storekeeper: "The night of the twentieth ? That's some time ago. Hmm."
(出典 MATSUMOTO, Seicho (1970) POINTS AND LINES Translated by Makiko Yamamoto & Paul C. Blum, Kodansha International p.40)

日本語原文は以下の通りの会話文となっている。

(1) 「ちょっと，おたずねします。」
(2) 「この店は，夜は何時ごろまで起きていますか？」
(3) 「11時ごろまで店を開けていますが」
(4) 「すると，9時半ごろに駅から出るお客は，ここから見えるわけですね？」
(5) 「9時半？ああ，そうです。9時25分発の上りがありますから，それは見えます。そのころは店は暇だし，果物を買ってくれる客はないものかと，見張っていますからね」
(6) 「なるほど。じゃ，20日の晩のその時刻に，30歳ぐらいの洋服の男と，24，5歳ぐらいの防寒コートを着た和服の女の連れが，駅から出てきたのを見ませんでしたか？」
(7) 「20日の晩？だいぶ前のことですな。さて」

（出典　松本清張（1972）『点と線』 新潮文庫版　pp.53－54）

英訳は小説全体を通して，原文に驚くほど対応している。これは(1)から(7)までの会話文についても言えることである。即興性を感じさせる間の表現が少なく，効率よく情報要求と応答がなされている点も，両者共通である。せりふ中の言語情報ですべてを説明しようとする姿勢は，文脈依存性を低め，この点も原文・訳文共に一致している。(2)と(3)の隣接ペアにおいては，情報要求に対して直接的応答が直ちに与えられ，(5)でも時刻確認の後，すぐに直接的応答がなされている。文法的にも問題のない英文と思われる。

2.5.3.　意識調査結果　― 翻訳小説会話文の自然さ ―

出典を消して，5人の英語母語話者に意識調査した。2人が言語学者，2人が自国での日本語教師，1人が英語教師で，全員，研究・教育面での言語テクストと接触がある人々である。ただし，調査自体は専門的知識を持ち込まず，直感に従い，手早く回答するよう依頼した。結果は全員がこの会話を(2)やや不自然だと答え，その理由として，イキイキしていない，完全すぎる，文が長すぎる，文構造が複雑すぎる，内容に比べて様式がフォーマルすぎるなどが挙げられた。回答後のインタビューでは，アメリカ英語が自分には不自然だという意見がイギリス人，オーストラリア人から出た。回答者は先にも述べたように，アメリカ人男女各1，オーストラリア人男女各1，イギリス人男性1であったが，これは調査に否定的に作用した恐れがある。すなわち，同じ日本語母語話者であっても，近畿方言の会話の自然さ判断を東京生まれ東京育ちの人間，あるいは，九州生まれ九州育ちの人間が求められたら戸惑うに似たような状況を作りだした恐れがあるからである。

さらに，上記会話については，自然な会話なら，(1)に Excuse me が欲しいし，(3)はただ，“11” か “until 11” が普通だという意見も出た。調査後のインタビューで，アメリカ人の一人がこの訳書を読んでいたことがわかった。読んだ時に会話文に対して違和感を持ったかという質問への答えは，以下の通りである。「会話文は文法的に正確すぎ，フォーマルすぎる。翻訳者がこの文体で，日本人の話し方を伝えようとしていると感じた。」まさに，日本

語からの翻訳小説というテクスト・タイプの判断の上に，自然さの決定がなされたのではないだろうか。

2.5.4.　日本語原文例B

以下のテクストは，会話文が多く軽い平易な文体で，若い読者層に支持されている小説の原文より得た。夫と妻の自宅での会話の描写である。

□日本語原文

(1)　妻：「何か変わったのに気付かない？」
(2)　夫：「ああ，なかなかいいよ」
(3)　妻：「何だか分ってるの？」
(4)　夫：「美容院に行ったんだろ」
(5)　妻：「そうじゃないの。部屋の中よ」
(6)　夫：「あれ，どうした？」
(7)　妻：「買ったのよ。特別安かったの。信じられないくらいよ！」
(8)　夫：「そうじゃないよ。前のやつはどうしたか，ってきいてるんだ」

（出典　赤川次郎（1983）『真夜中のための組曲』 講談社　pp.59－60）

2.5.5.　意識調査結果　― 小説原作会話の自然さ ―

意識調査の結果は，以下の通りである。

(1)かなり自然－28名　(2)やや不自然－33名　(3)かなり不自然－5名である。このテクストに関して，『砂の器』の脚本はもとより，原作よりも，自然だと考えた回答者は少ない。

判断の理由であるが，内容面の指摘は27で，「夫妻にありがちな光景だ」といった理由が多い。

自然さにも不自然さにも理由の第一に挙げられたのが，文脈依存性に関わるもので29理由あった。隣接ペアが単純な情報要求→直接的応答型になっていない点が，多く指摘されている。○省略が多いが，会話体としてはふつう。○かみ合っていない部分を補足しながら会話が続く。○日頃顔を合わせているので大切な主語などの部分が省略されている。

△(5)と(6)の間にギャップがある。△話が唐突でわかりにくい△質問と答えがくい違っている。△妻と夫の会話がちぐはぐだ。△「あれ」で夫婦の会話は成立することが多いが，ここではくい違いが大きく，やや不自然。

×夫と妻の意志疎通が最後までされていない。

文体性に関して，次のような理由が見られた。

△女性のことば遣いに不自然さを感じる（これは女性から複数指摘）

△(1)で普通は「ねえ」などの呼掛けがあるはずだ。

×つかわれている日本語が話の内容に合っていない。

「あれ，どうした」の「あれ」を指示詞とはとらず，間投詞と考えた回答者が複数いた。

テクスト・タイプの判断に関わると思われるのは，以下であった。

○テレビとか，本とかで似たような会話をよくみかける

△ありそうで，実はこんなにはっきり会話をすることはないのではという気がする。アメリカンジョーク集の翻訳版で見た気のする会話文。

△作った会話である。夫婦の会話はこれほどスラスラとはいかない。二人して「ハイ始めますよ」で始めたような会話。

2.5.6. 英語訳文例B

2.5.4.の小説の英訳，AKAGAWA, Jiro Midnight Suite Translated by Gavin Frew (1984) Kodansha International Ltd. も全体を通して，原文に非常によく対応している。以下は，3.2.3.の英訳部分から，地の文と出典を消して行った意識調査の結果である。

Husband and wife at home

(1) Wife: Do you notice anything different?

(2) Husband: Yes, it's very nice.

(3) Wife: Do you know what I'm talking about?

(4) Husband: Yes, you've been to the hairdresser's, haven't you?

(5) Wife: No, not that. Something in the room.

(6) Husband: Where...

(7) Wife: I bought it. It was a bargain. You won't believe how cheap it was.

(8) Husband: I'm not talking about that, where is the old one? That's what I want to know.

国を問わず男性は全員が(1)かなり自然と答え，女性は二人とも(2)やや不自然と答えた。自然さの理由として，「夫と妻の間の会話としてはきわめて自然」

が挙げられ，やや不自然の理由となったのは，文脈依存性が高いためわかりにくい点であった。原文が一文あたりの語彙数が少なく，客観的描写よりも表現意図を優先し，文脈依存性の高いものであることを見たが，訳文もそれに対応している。対応によって，英語が日本語の影響を受けて省略の多い不自然なものになったということはない。回答後のインタビューから，2.5.3.の訳文と異なり，英語母語話者の会話としても成り立つもので，日本人の会話か英語話者の会話か判断できないと答えた人と，英語話者同士の会話と考えた人，日本語話者同士の会話と考えた人のいることがわかった。テクストの種類も，原文が日英どちらかの判断もなしに，ただ，かなり自然であると判断されている。

2.5.7. 英語原文

以下は米人作家の手になる英語の原作より得た。殺人事件に関して，友人同士が話し合っている場面の描写である。

□英語原文

Friends talking about a murder case

(1) M1: You thought I killed her. You thought I killed her.

(2) M2: Lady was bad news.

(3) M1: Which makes it okay if I killed her ?

(4) M2: Did you ?

（出典　Scott Turow（1987）Presumed Innocent Warner Books, Inc. p.408）

一文の短さという点では，2.5.6.以上に短い。短さはこの会話だけに留まらず，小説全体を通して見られる傾向である。地の文は現在形をとり，スピードと臨場感にあふれている。ここでは情報要求も応答の仕方も明瞭ではない。背景説明がなければ，表現意図を汲むことが非常に難しい。

自然さに関する意識調査の結果，アメリカ人の一人は(1)かなり自然と答え，いかにもありそうな会話であるとしたが，この回答者は既に出典の小説を読んでいた。もう一人のアメリカ人は(1)と(2)との間の1.5とし，その理由に文法事項を挙げている。イギリス人はやはり文法事項から(2)のやや不自然を選んだ。オーストラリア人2人は(3)かなり不自然を選んでいる。不自然さの理

由として挙げられた文法事項は，発話(2)の冒頭に The が必要，テンスがおかしいであり，各発話のつながりが明瞭でないとの指摘と which の不自然さの指摘もある。アメリカ口語に対する許容性と，文脈依存性が，自然・不自然決定の要因になったと思われる。これもアメリカ人回答者のみを集めていれば，違う結果になっていたと思われる。

2.5.8. 日本語訳文

以下は 2.5.7. の小説部分の日本語訳である。

□日本語訳文

(1) 「きみは，僕が殺（や）ったと思ったんだろう」
リップはこれを予想していて，たじろぎもしない。ゲップを一つしてから，答える。
(2) 「あの女はいやなやつだった」
(3) 「だから殺してもよかったというのか？」
(4) 「やったのか，ほんとうに？」
（スコット・トゥロー（著） 上田公子（訳）(1991)『推定無罪 下』 文芸春秋 p.328）

この日本語訳も驚くほど英語原文に忠実である。文脈依存によって起きた発話のつながりの曖昧さ，疑似相互作用性など，非常によく対応している。この会話文だけでなく訳書全体を通して原文に忠実であり，しかも，日本語母語話者が，推理小説の会話文と知った上で読んで，違和感を感じるということはないと思われる。会話文(1)を見て，中年男性が信頼する友人，いわば，同志である中年男性に，「きみは」と言うかどうか，ここで原文の You の存在を問題にすることはできるかもしれない。しかし，2.5.1. で触れた待遇レベルの問題はこのデータに関しては小さいのではないか。また，(3)の「という」も「っていう」の方が自然だという議論は成り立とうが，自然さの印象の程度を変えさせるほどの要因になるとは思えない。

2.5.9. 米映画音声文字化例

以下はアメリカ映画の音声の文字化より得た。2.5.7. に対応する場面である。

□映画音声文字化

(1) M1: You think I killed her.
(2) M2: The lady was bad news.
(3) M1: So that makes it okay I killed her.
(4) M2: Did you ?
(Warner Bros. Screenplay by Frank Pierson & Alan J. Pakula Directed by Alan J. Pakula)

原作と音声文字化との差異は以下の通りである。

(1) テンス　thought→think

(2) 冠詞の付加　Lady→The lady

(3) 関係代名詞の変更　Which→So that

(4) if の省略　if I killed her ?　→I killed her

(5) 上昇調（または下降調）から下降調 if I killed her ? →I killed her

この差異は，一見，2.2.4. で見た，日本の映画の脚本と音声文字化との距離に，量的に対応しているように見える。はたして内容的にも同じ傾向を示しているのだろうか。

5 人の英語母語話者の回答を原作への回答と比べてみる。

表 2　英語母語話者回答変化

回　答　者	原作→映画	理　由
アメリカ人女性	1.5 → 1	(3)に that の挿入が必要
アメリカ人男性	1 → 2	なにか自然さが失われたと感じる
イギリス人男性	2 → 2	(3)に if，that，もしくは，句読点が必要
オーストラリア人女性	3 → 1	親友がくだけた感じで話している
オーストラリア人男性	3 → 3	文法的誤りもあり，まず起こらない会話

(1＝かなり自然，2＝やや不自然，3＝かなり不自然)

より自然に感じる人がわずかでも増したという点は，日本語の原作と映画文字化の場合と同様であるが，変化の内容はどうだろうか。(1)は意味的に微妙な変化，つまり現在もそう考えるかどうかの違いを示唆する。(3)は映画の方が口語的と言えるかもしれないが，(2)は原作の方が規範に反する形で，文法にこだわらない話し手の個性を印象付けようとしているように思われる。(4)は逆に映画の方がよりくずれた形になっており，複数の回答者が if もしく

は that の挿入を主張している。(5)は疑問調を弱める働きをしているだけである。

つまり，ここにはより自然な話しことばの要素を強めるような標識があまり現れていない。Leech & Short（1981）には，英語の自然会話と大半の創作会話との違いとして，「正常な非流暢さ」と呼ぶ要素が挙げられている。[11] つまり，(1)ためらいの休止（er とか erm といったフィラーが入ることもある），(2)言い間違い（繰り返しや言い直しにつながる），(3)構文の不整合，である。上記の変化はこれらと必ずしも一致しない。日本語では脚本から映画のせりふへの変化が，より自然会話に近付く方向を示していた。英語の方は映画の脚本を入手していないため，原作の会話文と映画のせりふで共通性のある限られた場面の比較になるが，そのどれについても特に自然会話に近付く方向は見られなかった。

2.5.10.　映画日本語字幕例

以下は 2.4.9. の場面の日本語字幕を出典とするテクストである。

□映画字幕

(1)　男A：僕が犯人と？
(2)　男B：ひでえ女さ
(3)　男A：だから殺してもいい？
(4)　男B：殺ったのか？

まず気づくことは，1 文の短さである。これは，日常会話に近付けるというよりも，字幕の制約が強く働いたためと考えるべきであろう。1 秒あたり 4 字以内とも言われる，観客の読む速さから来る制約である。結果的には 2 人で会話を作っていく，共話とも形容される要素を強めている。背景情報なしに，この会話を理解することは不可能に近い。

日本語話者に対する自然さに関する意識調査の結果は以下の通りである。(1)かなり自然－10 名　(2)やや不自然－21 名　(3)かなり不自然－29 名　無回答－6 名　で，不自然であると感じられる傾向が強い。

判断の 47 理由のうち，多いのは文脈依存性に関わる 34 理由である。自然

さの理由として「友人間にはあり得る」「実際の会話はこんなもの」「含意されている意図がわからないと文意がつかめない」「場面依存度が高い」などがあり，不自然さの理由として「省略部分が多すぎる」「話の脈絡がまったく見えない」「充分な情報提供がなされていないし，それぞれの意図がわからない」「意味不明」「発話されない部分が多すぎる」「発話間が飛びすぎる」「話のつながりがわかりにくい」「論理性に欠ける」「会話がかみあっていない」などがある。

テクスト・タイプ判断に関わるものとして，以下のような理由があった。

○含意されている意図がわからないと文意がつかめないから。こんな会話は実地ではないと成立しないだろう。

△劇のせりふのようだ。

×舞台がわからないので，話の内容が通じてこない

調査において，友人間の殺人事件に関する対話という説明だけで，背景説明も出典の明示も，テクスト・タイプの情報もなかったために，この結果になったと思われる。

実際の映画では，これは終わりに近い部分であり，それまでの背景知識の蓄積があり，画面からの視覚情報を得ている映画の観客にとって，矢印の右側のような意図を補って考えることはたやすい。

(1) 僕が犯人と？→君は僕が犯人だと考えているのだろう。

(2) ひでえ女さ→そう考えている。ひどい女だから殺すのは当然だ。

(3) だから殺してもいい？→ひどい女だったら殺してもいいのか。

(4) 殺ったのか？→そう言うということは，君が殺したのか。

2.6. 自然会話

2.6.1. 日本語の自然会話例

以下は，自然な会話をできるだけ忠実に文字化したものである。音韻レベルの文字化で，ほぼ正書法にのっとっている。

□日本語自然会話（友人同士）

(1) 女A：赤ちゃん，どうだったんですか？

(2) 男A：うん？どうだったって？
(3) 女A：かわいかったんですか？
(4) 女B：どっち似？
(5) 男A：かわいかった……親にきくのはねえ，答えようがないねえ。
(6) 女B：だからどっち似？
(7) 男A：うん？ああ，どっちかと似てるってゆうのはね，なんかぼくに似てるそうだ。
(8) 女B：じゃ，かわいいのかな。
（出典「録音器　パパになって二週間」（1976.1）『言語生活　292』p.55）

前述の66人の母語話者に対する自然さの意識調査の結果は，以下のとおりである。

(1)かなり自然－22名　(2)やや不自然－17名　(3)かなり不自然－9名　無回答－18名で，小説の会話文よりも，映画の脚本よりも不自然の方へ，わずかながら寄っていることになる。しかし，ここで注目すべきなのは，無回答率の高さである。7つの会話テクストの中で一番最後に置かれたのがこの会話であり，回答疲れという要素は無視できないかもしれないが，わずか10分の調査時間である。回答時に時間切れの様子があまり見られなかった点を考えると，無回答18名は他の理由によると考えてよいと思われる。そこで考えられるのは，テクスト判断に関わる点である。つまり，回答者はこの会話テクストの種類の決定が出来ず，そのために自然さの判断をしなかったのではないだろうか。

自然だと感じる理由として挙げられたのは「普段ありそうだ」「普通の会話」「話題がはっきりしている」「2人が1人に同時に別の質問をすることはよくある」「聞き返しが自然」「補足しながら続く」「まあ，こんなもの」「日本語の会話では省略が多いのはふつう」等である。

不自然だと感じる理由に，「回りくどい」「まだるっこしい」「かみ合っていない」「話者間の関係が不自然」などが挙げられている。○「会社で，よく，赤ちゃんの生まれた男の先輩などとかわしている会話と全く同じ」という意見がある一方，以下のような意見もある。

△いかにも作文した感じがする。

×子供を持った父親は，こんな小説の中のような話し方はしない。友人同士であれば，なおさらひとこと目に「かわいいよ」と言うはずだ。
×男の答え方が親らしくない。

2.6.2. 英語の自然会話例

以下は英語の自然会話の文字化からの例である。これも正書法にのっとってデータを書き直したため，原資料に比べて音声情報はかなり落ちている。

□英語自然会話　（友人同士）

(1) M 1: What was he lecturing on ?
(2) M 2: Planning in Shell − I think.
(3) M 1: Survey, the correct term is. Em, planning in, em, Shell.
(4) F 1, 2: [（笑い）　　] （同時発話）
(5) M 1: [Is that − is] that who you work for ?
(6) M 2: Group planning, no, I don't work for group planning, I work for the computer people − in Shell.
(7) M 1: Their own, erm, a part of the outfit, not a, not a − an outside firm.
(8) M 2: mm.

（出典　SVARTVIK, Jan & QUIRK, Randolph（eds.）1980 A CORPUS OF ENGLISH CONVERSATION C W K Gleeruplund p.670）

英語母語話者の回答は以下の通りである。(1)かなり自然だと感じた人が3人，(2)やや不自然が2人であった。これが自然会話の文字化だということは，繰り返しや間の表現などから，全員が見抜いたようで，その上で「よく意味がわからない」「書かれていると文脈上不自然に思える」との理由でやや不自然とした回答者がいる。「明らかに，第二言語学習者で正確な語が使えない人達の会話である」という意見があったが，実際はイギリス人同士の会話である。ちなみにイギリス人回答者は自然な会話だと答えているが，この回答者は出典を見抜いていた。

2.6.3. 自然会話の特徴

自然会話では，談話開始のあいさつから入り，徐々に本題に入り，その本題も脱線したり行きつ戻りつし，最後に会話終結のあいさつに至るといった流れをとることも多い。2.6. に挙げたデータは，日英両方とも導入部分も終

結部分も出てこない。データにとったのは，まん中部分のごく一部である。日本語には言い間違いも同時発話も見られない。視覚的な場の情報がなくても支障のない部分で，淡々と言語による伝達が進行しているはずの部分である。それでも，なおかつ情報要求→応答の流れがスムーズに進まないことを見ることが出来る。ドラマのように，都合よく情報が整理されて出てくるわけではなく，聞き手は瞬時にして，相手の発話の中から自分で必要な情報をすくい取る作業をしなければならない。真の相互作用性，即興性のために，問い返し・確認作業が必要になり，実際，頻繁に行われてもいるのである。

2.7. 調査結果まとめ

以下にアンケート回答で自然だと感じられた順に，会話を並べる。英語は回答者の数があまりにも少ないので，細かい数字は省略した。

表3　日本語会話

出　　典	1	2	3	無回答	理由	言及	文脈
映画脚本『砂の器』	44	13	4	5	41	19	0
原作『砂の器』	30	22	7	7	35	6	0
原作『真夜中のための組曲』	28	33	5	0	62	4	29
自然会話『録音器』	22	17	9	18	30	2	3
映画字幕『推定無罪』	10	21	29	6	47	3	34

「理由」＝自然さ判断の理由の記入数
「言及」＝テクスト・タイプに言及している理由の数
「文脈」＝文脈依存性に言及している理由の数

表4　英語会話

出　　典	1	2	3
翻訳『真夜中のための組曲』	3	2	0
自然会話『A Corpus of English Conversation』	3	2	0
映画せりふ『推定無罪』	2	2	1
翻訳『点と線』	0	5	0
原作『推定無罪』	1 1	1	2

2.7.1. テクスト・タイプと自然さの判断

表3の言及欄は，回答者が会話の自然さを判断するにあたって，まずテクスト・タイプに関する判断を問い，次にテクスト内の発話のまとまり，つまり，テクスト性の判断をした場合が多いことを示唆する。

(1) 日本語の映画脚本およびその原作は，自然会話との距離がかなりあるにもかかわらず，自然だと感じられる程度が高かった。判断の理由としてテクスト・タイプへの言及が多い。

(2) 日本語の自然会話に対しては，テクスト・タイプへの言及が少なく，自然さの判断回避が多い。

(3) 自然会話の文字化は，日本語の方が即興性に起因する非流暢さが少ない。しかし，英語の会話よりも不自然であると受け取られている。

現実の言語運用を反映した自然さがあるかどうかを理由に挙げた回答でも，テクスト性の要素は無視できない。言語研究者がデータの妥当性を判断する際も，同様の判断をする可能性も強い。今回の調査で，全会話の対話者を友人同士に統一してあれば，異なる結果が出たと思われる。回答者が言語分野とはまったく関係のない人々であれば，それも異なる結果につながったかもしれない。

2.7.2. 応答の直接性・間接性と自然さの判断

表3の文脈欄を見ても，文脈依存性，あるいは応答の直接性・間接性が，自然さの判断因子となっていると思われる。そこで，情報要求機能を持つ会話文を3つの小説の冒頭から100文まで抜き出した。そして，それに続く会話文とで「情報要求→直接的応答」ペアをなすものの割合を調べてみた。なお，情報要求機能は多くの場合疑問文の形をとるが，依頼文，平叙文の場合もかなり見られる。その詳細については別の機会にゆずりたい。

以下の情報要求文への応答は会話文ではなされず，地の文で与えられている。

(1) 「女の方の身もとは，どうだね？」 それは出てきた。

(pp.27－28『点と線』)

(2) 「彼女に取りに行かせたの？」 中田は，顔から血の気がひくのが分った。

(p.32『真夜中のための組曲』)

(3) "What kind of leads are we running？"（現在の捜査状況は？）

Lipranzer begins to tick it off for me.（これは，リップが一つ一つ説明してくれる） (p.25 Presumed Innocent)

以下の隣接ペアでは，情報要求に対する応答が間接的になされている。

(1) 「八重ちゃんはまだですの？」「もうすぐ来るだろう」 (p.9『点と線』)

(2) 「しかしどうやって持って帰ります？」「タクシーを待たせてありますので。」 (p.67『真夜中のための組曲』)

(3) "You mean, you think she'd open the door to some bum she sent to jail？"（というと，自分が刑務所へ送ったならず者にドアを開けてやった，そう思うのか？）

"I think with Carolin there's no tellin."（キャロリンのことだ，何をやったって不思議じゃないさ。） (p.28 Presumed Innocent)

上記の例はすべてややずれた形で応答を示唆している。間接的な応答にはこのほかに，情報要求文形式の確認，表現意図確認，埋め込み質問，メタ言語的応答が考えられる。また，話者の自己修復によるゼロ応答，情報要求無視による非関連応答など，応答回避の例も多い。

以下の隣接ペアでは，情報要求→直接的応答の流れを見ることができる。

(1) 「その電話は，かかってきたかね？」「かかってきました。」

(p.35『点と線』)

(2) 「もう忘れていることはない？」「ありません・・・・・・」

(p.33『真夜中のための組曲』)

(3) "Who is the kid？"（あの若い子はだれです？）"Her son."（息子だよ）

(p.17 Presumed Innocent)

『点と線』では，100ペア中67ペアが，直接的応答型であった。

(pp.5－97 －冒頭から約40%の部分，方言の部分は除外)

『真夜中のための組曲』では，100ペア中56ペアが直接的応答型であった。

(pp.9－84　－冒頭から約25%。但し短編集のため，2つの短編全文と3つめの短編の冒頭部分にあたる)

Presumed Innocent（推定無罪）では，100ペア中41ペアであった。

(pp.7－68　－冒頭から約15%，子供との会話は除外)

すべてのデータにおいて，訳文は原文に非常に近い率を示している。このデータで見る限り，原作日本語の会話文より，原作英語の会話文の方が，応答回避か間接的応答が多いということになる。しかし，データの範囲と量がきわめて限られているため，自然さ判断との関連性を論じることはできない。また，これが著者の個人的傾向を示すものか，対象とする読者層の会話の傾向を示すものか，作中人物の属する社会的階層の会話の傾向を示すものか，日米の推理小説の文体の差異を示すものか，日米のコミュニケーション・パターンの差異を示すものか，小説執筆の時代的差異を示すものかは決定できない。今後，自然会話を含めた，多量のデータの中で見ていきたい。

3. 結　論

3.1. 本稿の結果と教育への利用

本稿のデータからは，最初の仮説に対し以下の結果を得た。

(1)の疑似即興性が自然さを高めるという仮説は，ある程度検証された。つまり，日本語のデータで見た限りでは，小説→脚本→せりふの順に，疑似即興性が増す。英語のデータにおいては，それは認められなかった。

(2)の整理された構造が自然さの判断にはあまり影響しないという仮説も支持されたと考える。書かれた会話を目にした母語話者は，読解のスキーマを活性化させ，想定したジャンルにおける会話文の自然さを判断することが多いと思われる。本稿の限られたデータからも，自然だと感じられる会話文でも，話者のモダリティー表現，省略表現，視覚コンテクストの利用を表す指示詞，日常語彙の割合，待遇表現，男女差に関する分析のデータとして用いるには，慎重な選択が必要であること，特に，小説の会話文を利用することの問題点が見られた。

(3)は否定された。文脈依存性の高さは，必ずしも自然さとは結び付かない。場を共有しない回答者にとっては，むしろ否定的要因となった。ただ，今回のアンケートでは，背景知識も場面情報も皆無に近いため，現実の会話とは非常に異なる状況下での調査であることを考慮する必要がある。

(4)自然会話と創作会話との距離および翻訳との関係に関しても，仮説はほぼ支持されたが，本稿で扱ったデータでは，原文と訳文のかなりの一致を見た。しかも，訳文は日本語にしても英語にしても，文法的に問題がなく，社会的にも（創作会話という枠内では）適切であると判断されるものである。各翻訳者の力量は当然のこと，現代推理小説というジャンルが日英の対応をしやすくしているのかもしれない。

3.2. 教育への利用

最後に，語学教育との関係に触れたい。例えば，英語の一般映画を，英会話能力の育成を目指す授業に利用する場合に例をとって考える。まず，用いる映画のせりふと，同様の文脈における自然会話との距離が考えられるべきである。創作会話は自然会話から「正常な非流暢さ」を除去し，効率的な情報伝達を込めて，理想的な会話を作り上げたものというわけではない。構造の二重性に起因する距離もあれば，ジャンルの文体性に起因する距離もある。推理ドラマといってもせりふの鑑賞性もあり，個々の制作陣の姿勢によって距離には差がある。

次に，授業活動として映画を視聴することによって，自身が当事者となった時の自然会話を管理する能力が身に付くかどうか，整理されていない会話でも瞬時に対応していく力がつくかどうか，もし映画からは付かないとすればその能力はどこで付けるのかといったことを，コースデザイン全体の枠組みの中で考える必要がある。「自然な」せりふの視聴は，利用方法によっては映画テクストの聴解力を伸ばすだけということにもなる。

そして，繰り返して視聴することによって学習者の記憶と結び付いたとして，それは何を意味するのか。かつて日本人は「教科書体の英語を話す」と形容されたことがあった。それが「ドラマ体の英語を話す」と変わるだけで

あってはならない。ある言語使用域にふさわしいスピーチパターンを知った上で，自分のことばで話すことと，ドラマの練り上げられたせりふを模倣することとは異なる。「話す」ということは，個々人の根幹にかかわることであり，模倣の域に留まるべきものではない。

3.3. おわりに

会話能力を捉えるにあたって，理想的な話し手・聞き手を設定し，分析者の母語話者としての内省を最大限に利用する立場がある。現実にどのように具現化されたかを自然発話の録音・録画データの分析という形で捉え，それを出発点に言語能力に迫る立場もある。話者の意識をアンケート調査で問うことも，分析者が面接インタビューを行うことも，なんらかのタスクによる誘出法をとることも，それぞれの立場の研究に有用なデータを提供するだろう。対照研究を行うにあたっては，しばしば言われることではあるが，第一にそれぞれのデータ収集法の長所と短所を認識し，得られるデータが対照する項目に抵触する点がないかを見極める必要がある。また，ひとつの言語はせりふの文字化を用い，もう一方の言語の方は脚本をそのまま用いるといったことは極力避けたい。常に，両言語を同じテクスト・タイプの中で，そして出来れば，異なる角度から得たデータを組み合わせること，これが対照研究，特にコミュニケーション能力を視野に入れた対照研究においては，重要な視点だと思われる。今回のきわめて小規模な調査からも，自然会話と創作会話の“自然さ・不自然さ”が再確認出来たと思う。さらに，創作会話を母語話者がなぜ自然だと感じるかの一面が，確認できたのではないだろうか。今後も自然会話も含めて，幅広く異なるメディアに現れる会話データを収集し，異言語間の対話構造の検証を進めたい。

注

1) p.4 Burton　1980
2) p.302　西岡琢也　1984
3) p.14　佐竹秀雄　1992
4) 1952年に行われた国立国語研究所の談話語の実態調査でも，東京の様々な調査地点・調査対象・調査場面で，資料採集が行われ分析されている。また，斎賀

(1983) からも，その時点までに採集・分析されたデータに種々の話しことばが含まれていることがわかる。一方，米国では，SACKS, Harvey の 1964 年の講義に始まったとされる会話分析が，1968 年の SCHEGLOFF の電話の会話切り出し分析をはじめとして，多くの優れた成果を生み出している。

5) pp.54－55　国立国語研究所　1955
6) p.9　国立国語研究所　1955
7) p.66　吉田光演　1988
8) p.869　『大修館英語学事典』
9) p.25　木下順二　1982
10) pp.144－145　木下順二　1982
11) p.161　LEECH & SHORT　1981

参考文献

樺島忠夫　1979 『日本語のスタイルブック』大修館書店

木下順二　1982 『戯曲の日本語』中央公論社

国立国語研究所　1955 『談話語の実態』国立国語研究所

国立国語研究所　1960 『話しことばの文型(1)』秀英出版

斎賀秀夫（編）　1983 『話しことばの計量国語学的調査・分析のための基礎的研究 研究報告書（第三分冊）話しことばデータ集一覧』国立国語研究所

佐竹秀雄　1992 「新言文一致体の計量的分析」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』第 3 号

西岡琢也　1984 「『小津映画』を支えたシナリオ≪会話≫」『表現のスタイル　講座日本語の表現 4』筑摩書房

『日本語学』 1991. 8　Vol.10　明治書院　（特集　新しいデータ・新しい研究）

野元菊雄ほか　1980 『日本人の知識階層における話しことばの実態調査の概要と分析』国立国語研究所日本語教育センター（特定研究「日本語教育のための言語能力の測定」研究報告書）

松浪有，池上嘉彦，今井邦彦（編）　1983 『大修館英語学事典』大修館書店

吉田光演　1988 「対話性とテクスト ― 戯曲の対話分析の試み（Brecht, Kroetz を例に）―」『テクスト分析の研究 ― 日・独テクストの対照研究を中心に ―』（昭和 62 年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書）

ALLEN, Donald E. & Rebecca F. GUY　1974　*Conversation Analysis* Mouton & Co. N. V., Publishers

ATKINSON, J. Maxwell & John HERITAGE（eds.）　1984　*Structures of Social Action, Studies in Conversation Analysis* Cambridge University

Press
BROWN, G. and G. YULE 1983 *Discourse Analysis* Cambridge University Press
BURTON, Deirdre 1980 *Dialogue and Discourse; A Socio-linguistic Approach to Modern Drama Dialogue and Naturally Occurring Conversation* Routledge & Kegan
JEFFERSON, G. 1972 "Side Sequences". In D. SUDNOW (ed.) *Studies in Social Interaction* pp.294-338
LEECH, Geoffrey N. & Michael H. SHORT 1981 *Style in Fiction* Longman Group Limited
SCHEGLOFF, E. A. 1972 "Notes on conversational practice: Formulating place" In D. SUDNOW (ed.) *Studies in Social Interaction* Free Press pp.75-119
SCHENKEIN, Jim (ed.) 1978 *Studies in the Organization of Conversational Interaction* Academic Press, Inc.